

日々、景色が春の色に染まっていき、心浮き立つ季節がやってまいりました。

いまだ新型コロナウイルスは世界中を脅かす存在であり、私たちは日々不安な気持ちを抱えながら生活しています。このような状況下で、本日は教職員の皆様をはじめ、お忙しい中、感染症対策を踏まえた幾度もの思案を重ね、このような盛大な卒業式を挙行して頂きましたことに、卒業生一同、心より御礼申し上げます。また、高橋圭三学長先生からの温かいお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

大学生活の四年間を振り返ると、慣れないスーツに身を包み、期待と不安を胸に抱えて松山東雲女子大学の門をくぐった入学式の日のことが、鮮明に思い出されます。瞬く間に過ぎ去った私の四年間を近くで、また陰ながら支えてくださった、教職員の皆様、家族、友人のおかげで、私は今この場に立つことが出来ています。

一回生は、経験のない九十分の講義、主体性を求められる課題、初めて親元を離れ、一人暮らしの生活、未知の体験ばかりで不安が尽きませんでした。

二回生、私が所属していた子ども専攻では、初めての実習がありました。実習と帰宅してからの実習ノートで、疲れ切った私を支えてくれた家族の存在は大きかったです。

三回生も実習が多くあり、前回の実習の課題に対しての具体的な解決策や打開策が思い浮かぶ間もなく、次々に迫る実習の現場に立ち、本当に保育者として将来働くことができるのか、それだけの覚悟ができるのか、苦悩した一年でした。しかし、実習を終えた後、友人の話を聞くと、同じような不安や焦燥感を抱えており、私は一人ではないのだと実感することができました。また、辛いことだけでなく、楽しかったことも共有していると、もう一度頑張ってみようと思えました。苦悩しながらも、前向きになれた三回生、希望が垣間見えた矢先、新たな脅威に私たちは悩まされることとなりました。

二〇二〇年四月七日、国内の一部都道府県に緊急事態宣言が発令、そしてその対象は同月一六日に全国へと拡大しました。新たな脅威とは新型コロナウイルスです。大学生活最後の一年が始まった瞬間、私たちは大学に通うことすらできなくなりま

した。切磋琢磨しあった友人にも会えず、慣れない遠隔授業に戸惑う日々。自粛ムードの世の中で、様々な立場の人が様々な我慢をしてきました。大学で講義を受け、友人と笑いあう、当たり前前の日常がいかにありがたいことだったのか、思い知ることとなりました。このような状況の中で、教職員の皆様が、私たちに学習の機会を何とか提供しようと、遠隔授業の準備を進めてくださいましたこと、大学に通うことはできなかったものの、私たち学生と密に連絡を取り合ってくださいましたことを心より感謝致します。講義自体は、一人でしたが、孤独感はなく、ここでもやはり一人ではないのだと実感することができました。

この四年間を振り返ってみると、大学生活は瞬く間に過ぎ去っていきました。松山東雲女子大学で、なりたい自分になるために、目指す夢のために、教職員の皆様のアットホームなサポートのもと、友人と切磋琢磨しながら、そして家族に支えられながら、大きな一歩を踏み出すことができました。次への新たな一歩に向けて、当たり前前の日常を噛みしめながら、周囲の方々と協同し、学ぶ姿勢を忘れることなく、社会に貢献していくことを、ここで決意致します。

最後になりましたが、お忙しい中で、私たちに寄り添い、ご指導してくださいました教職員の皆様に、卒業生を代表し、心より感謝申し上げます。また、慣れない一人暮らしを全面的に支えてくれた家族にも感謝しています。ありがとうございます。そして、四年間一緒に過ごした友人たち、本当にありがとうございます。これからの道はそれぞれ違っているけれど、またみんなの話をゆっくり聞かせてください。いつかどこかで、マスクなしで、笑って再会できることを楽しみにしています。これまで関わった全ての方に心より御礼申し上げます。そして、松山東雲女子大学の今後益々の御発展と、皆様の御健勝御多幸をお祈りし、答辞とさせていただきます。

二〇二一年三月一二日

卒業生代表